

《7月例会報告》

庄司和晃 研究遍歴談話録

中間報告

私の研究遍歴・談話録（2）

庄司和晃

◆寺に生まれた、という運命

いまから思えば、自分が寺に生まれたということは運命的なことだ、と庄司先生は述懐する。

若くして三浦つとむに出会い唯物論と観念論の狭間で悩みながら、共産党を除名された三浦つとむ、板倉聖宣氏らと仮説実験授業を展開していく。その中からやがて三段階連関理論を編み出していくのだが、成城の先生たちから“形而上学もやった昆虫学者”といわれた一面もあり、生き物への研究はこの頃から傾注していたことがわかる。

成城学園での科学教育研究から『科学ばかり主義の克服』（1986 明治図書）『コトワザ教育のすすめ』（1987 明治図書）『人はなぜオカルトに魅かれるのか』（1997 明治図書）へと続く非科学教育論に至る背景には、民俗学手法とともに宗教への造詣がなければ成されなかったと思われる深い

認識がある。

山形のお寺の次男、そして曹洞宗という禅寺に生まれたという出自も見逃せない。戦後まもなく後継者として何度か他家へ養子に出されるということはあったものの、お寺を継ぐことにとらわれない宗教的環境、そして仏教の中でもいちばん哲学的といえる禅への傾倒が宗教学を身近なものにしたと感じた。

◆敗戦でなく終戦

話の中で、現在でも靖国神社に参拝すると先生は言われた。庄司先生の脳裏には「靖国で会おう」と誓い合い若くして逝った戦友の姿がいまでも残っている。そこにはイデオロギーの争点となって政治の舞台のまっただなかにある喧噪な靖国ではなく、若い仲間との再会の場としての純粋な靖国があると感じた。

戦後日本の批判として「敗戦」をあえて「終戦」と欺瞞的に言いかえてきたという最近の鋭い論陣（『永続敗戦論』白井聡2014）があるが、出征した先生の中には敗戦を受け入れがたいという思いがいまでも強く残っていることに驚かされた。あの若

き往時の熱き思いはいまだ消え去っていない。

◆力量をみがく成城学園へ

軍隊で不完全燃焼で終わってしまった若いエネルギーは、山形へ帰郷し模索の日々を過ごす。そして先生は故郷山形で小学校の教員となる。素行の悪い生徒がいる中で東京の成城学園が全国から教師を募集していることを知り応募するのである。

「成城は開眼道場である」と庄司先生は言う。（「著作集5「教育者としての青春」）その沢柳政太郎の薫陶が生きている成城学園は一斉授業がほとんどなく、クラスで南武線に乗せ鶴見まで行きお寺で遊ぶほど自由であったという。散歩、動植物の観察、草食ベ等実践活動が先ずあり、抽象的な算数などは先取して授業をやることが無かった。そんな中でそろばんに注目した庄司先生は、誰もやっていないそろばん教育を成城学園で展開したという。ここに具体と抽象の無意識ののぼりおりのヒントが見て取れる。

◆柳田国男との出会い

当日、「一年生という子ども」（成城学園「教育研究」1951）という冊子のコピーが紹介された。見事なガリ版刷りであった。そこには児童言語採集研究時代と明記されていた。

目次を見ると冊子の巻頭は柳田とも何度か対談している成城学園初等学校の校長柴田勝とある。タイトルは「子どもの言葉はまことに魅力的である」とある。柳田国男の言語採集研究を彷彿させる。

近所に住み成城学園の教育にも影響を与えた柳田国男は、「騒音も集めるといいですよ」といっているくらい子どもの言動に関心が深かった。こまめに記録する庄司先生の研究姿勢とその勘所をなにげなく助言する柳田国男がうまく混ざり合った瞬間を

私は想像した。

子どもの言葉を克明に聞き書きする姿は山田さんが「小学生の民俗学」というように一つの研究スタイルといってもいい。そこに「子どもは家庭の教育を背負っている」から学校で画一的に教育しないほうがいいという柳田の教育観が重なり、化学変化を起こしていく。…

以上この談話は、昨年1月に例会で話されたものの続編です。記録は尾崎さんによっていずれ詳細が報告されますので乞うご期待を。

介護の流儀

滝北利彦

◆紙芝居「ヒーローらしさとは」

昨年4月以来の介護士を養成する教員でもある滝北さんの登場。

介護の現場は多忙を極め、労働の対価ほど認められているとはいえないという。そんな現場にいる滝北さんだが相変わらずエネルギーで温かい。

完成度の高い紙芝居「ヒーローらしさとは」は、滝北さん自作の作品で、介護士をめざす若者向けの啓発教材といってもいいだろう。

ヒーローの原則

- ・弱音を吐かない！
- ・敵から逃げ出さない！
- ・燃え尽きない！

作品は、介護士をヒーローと重ね内なる闘志を燃やすとともに、現場の疲弊に屈することなく活躍する姿をアニメの主人のようにかっこよく描いている。

やなせたかしのアンパンマンにもなぞられるヒーローは、戦争を経て生を生かされたやなせたかしの無心の奉仕の精神を体現しているように描かれている。

ヒーローの原則は決して他者に押しつけるものでない。としながらも、アンパンマンが自分の身を与えることができるという行為を、使い捨てではなく相手を思い傷ついた経験とするという認識に昇華していくところに、介護士の内なるヒーロー観が見える。その行為はやがて「土に還り、次のエネルギーに変わる」という物語として語られていく。

◆一緒に人間やめますか

滝北さんが紹介した現場の話で一人の介護実習生の女の子（高校生）が、高齢の男性患者さんに「もう人間やめたいよ」といわれ、「一緒に人間やめますか」と答えたというエピソードを紹介する。

滝北さんも対応に苦慮したそうだが、悩める高校生のこの言葉を巡って参加者の意見が白熱した。

患者さんに言うてはいけない言葉ではないか、高校生になかなか理解されない、介護される側の自己嫌悪がそう言わせたのだろうという発言の中で長谷川さんが、「一緒に…」という言葉に着目した。

曰く、この子は実は「人間やめたい…」と言った患者に寄り添っているのではないかというものだ。

生徒と指導者の双方向のコミュニケーションが成立する教育現場になぞらせれば、介護の現場にも双方向のコミュニケーションが存在する。それは、この場合のように時に感情的なものであっても、それを受け止める関係であれば言葉はぐっと深くなる。

家族にでもなかなかいえない言葉を女子高校生に吐露し、それをまた自分の感情を

乗せて直球で返したこのシーンは図らずも我々に介護の現場のリアリティを突きつけてくる。

小田さんからもコミュニケーションの今日的意味の重要性を提起されているが、日々の何気ない応対の中に深い意味を感じ取る感性を磨くことも重要であると気付かされた発言であった。

尾崎さんが、経験を踏まえて介護は無理をせず穏やかにと語ったが、誰も避けて通れない介護という関係をどう自分なりに認識するかは、それぞれの生き方と関連しているのではないだろうか。

しりとりに遊び

向井吉人

向井さんは残念ながら欠席だったが、伊東さんに託して紹介された作品が「しりとりに遊び」（瑞穂町立瑞穂中学校・7組）。私も中学校に長くいたので中学生のメンタリティを作品を通して感じる事ができた。

しりとりの手法で詩のような構成にしたこの作品は向井さんが乗り移ったように巧みだ。内面を語りたがらない中学生の内なる言葉が、しりとりという形で表出しおもしろい。詩の終わり方にそれぞれの工夫があり、書きっぱなしで言い放しでないところが中学生らしいレトリックを感じさせる。

向井さんの最近の連作『疾走する認識論』『冒険する認識論』『恋する認識論』での展開は、日本語の学習を縦横無尽に展開し見事というしかない。この手法で我々も世の中を見つめていかなければと思うばかりだ。

また、庄司先生が昭和20年代から克明に記録し保存している子どもたちの記録の

多さに驚くばかりだが、向井さんにも同じことが言えるのではないだろうか。

それはまた柳田国男のように、手垢がつかない精緻で克明な言葉の採集と分類作業のようでもあった。

日常から考える歴史感覚

徳永忠雄

被災地を歩いて考えたことは、震災をはじめとする様々な被災が決して非日常の不幸な出来事として片付けてはいけないという思いだ。

日常の中の惰性が陥穽となって被害を広げてしまった事実を福島原発の崩壊と大川小（石巻市）の現地を見ることによって強く感じた。

私は、柳田国男を読む中でそれを日常の中の歴史感覚の喪失とみている。歴史とは単なる過去ではなく現在につながる過去であり、今日の自分は昨日の自分とつながっているというのが日常の歴史感覚だ。地域にはそれぞれの風土にあいまった歴史がうずたかく積まれている。東北の津波は歴史の中から否が応でも再起させられたとみていい。

大川小は近隣の避難場所だったが、未曾有の津波はそこも飲み込んでしまった。現場の責任者である教員は判断に迷い右往左往した。マニュアルでしか行動できなくなったとき人はあまりに無力だと思い知らされた。

福島原発の周辺（大熊町、富岡町）は、過去の町となっていた。町内の数カ所にある政府が建てた放射能線量測定地は周辺よりも低いという欺瞞。オリンピックまでに常磐高速を全線開通させるという無駄。

目先の利害ではなく 100 年後 200 年後の未来を思うとき、われわれは原子力発電と

どう向き合うべきなのだろうか。その判断は、政府や大企業にゆだねてはいけないという思いを強くした。

全面研ホームページ リニューアルオープン

尾崎さんが運営編集管理する全面研のホームページが、ハード容量をアップしてリニューアルオープンした。

貴重な資料や足跡が満載だが、それらをどのように現代化していくか、我々全面研を長年支えてきたメンバーの課題ともいえる。

学校教育現場は多忙を極め、指導手法も金太郎飴化している様子がうかがえる。何よりも認識論や柳田の教育論で自立的にものを考えてきた我々とは異なる方向に向かっているようにも見えてくる。

全面教育学の手法をもっと展開できればと思うばかりである。

7月例会参加者

庄司、長谷川、滝北、山田、武田、伊東、尾崎、小田、徳永

訂正：会報「しんらばんしょう」のナンバーリングが間違っていることに気付きました。16号が欠番となっています。そこで今回を19号として訂正致します。ご了承下さい。

【10月例会】

日時： 10月4日（土）

14：00～17：00

場所：成城学園大学棟3階 奥控え室

内容：庄司先生の研究遍歴（3）

そのほか持ち込みレポート